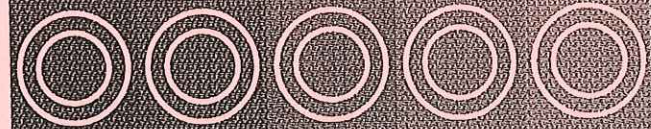


創世ホール通信 No. 272

催し案内 + 文化ジャーナル
 2017年9月1日発行 ■北島町立図書館・創世ホール
 電話088・698・1100◎ファクシミリ088・698・1180
 771-0207◎徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91◎



江富久雄◎こども写真展

9月1日(金)～3日(日) 10時～17時

会場●2階ギャラリー

無料

主催●江富久雄こども写真展実行委員会(☎088・698・6888)



創世ホール名画観賞会 26

人生フルーツ

9月30日(土) 3回上映

①10時30分～ ②13時～ ③15時～

会場●2階ハイビジョン・シアター

入場料●大学生・一般/前売1000円(当日1200円)、小・中・高・シニア(60歳以上)当日のみ1000円

作品●「人生フルーツ」(2016年、日本、91分)

出演=津端修一、津端秀子 ナレーション=樹木希林 音楽=村井秀清
 監督=伏原健之

主催●北島町立図書館・創世ホール(☎088・698・1100)

■人生は、だんだん美しくなる■津端修一さん90歳、英子さん87歳。
 風と雑木林と建築家夫婦の物語■風が吹けば、枯葉が落ちる。枯葉
 が落ちれば、土が肥える。土が肥えれば、果実が実る。こつこつ、
 ゆっくり。人生、フルーツ■愛知県春日井市の高蔵寺ニュータウン
 の一隅。雑木林に囲まれた一軒の平屋。それは建築家の津端修一さん
 が、師であるアントン・レーモンドの自邸になって建てた家。
 四季折々、キッチンガーデンを彩る70種の野菜と50種の果実が、
 妻・英子さんの手でおいしいごちそうに変わります■長年連れ添った
 夫婦の暮らしは、細やかな気遣いと工夫に満ちていました■「家は
 暮らしの宝石箱でなくてははいけない」=これはモダニズムの巨匠、
 ル・コルビュジェの言葉です■ナレーションを務めるのは樹木希林。
 この国がある時代に諦めてしまった本当の豊かさへの深い思索の
 旅が、ゆっくりとはじまります■会場は2階ハイビジョン・シアタ
 ーです。多数、ご参集ください。



人生は、だんだん美しくなる。

ナレーション 樹木希林

プロデューサー:阿武野勲彦 音楽:村井秀清 音楽プロデューサー:岡田こずえ 撮影:村田敬崇 音声:伊藤紀明 オータランダ:山口幹生 TK:須田麻紀子
 音響効果:久保田吉良 編集:奥田裕 協力:日本映画専門チャンネル 監督:伏原健之 製作・配給:東海テレビ放送 配給協力:東風
 2016年/91分/HD/16:9/日本語/ドキュメンタリー ©東海テレビ放送

津端修一さん90歳、英子さん87歳 風と雑木林と建築家夫婦の物語 life-is-fruity.com



北島トラディショナル・ナイト Vol. 21

英国・ケルトの愛らしい旋律

歌とリュートによるルネサンスから現代のブリテン諸島の歌曲の数々
 平井満美子・佐野健二コンサート

10月27日(金) 19時～(18時半開場)

会場●3階多目的ホール

入場料●前売/大学・一般2000円、小・中・高1500円(当日各500円増)

出演●平井満美子 ソプラノ
 佐野健二 リュート

主催●北島トラディショナル・ナイト実行委員会(☎088・698・1100)

共催●北島町立図書館・創世ホール

後援●アイルランド大使館、徳島新聞社、朝日新聞徳島総局、四国放送ほか

■ケルト文化圏の美しく豊かな音楽を探求する「北島トラディショナル・ナイト」は1997年秋にスタートしました。20周年の今年は、世界古楽界の至宝、平井満美子・佐野健二ご夫妻をお迎えし、ブリテン諸島のリュート歌曲をお届けします。多数、ご参集ください。



文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

より良い文化施設をめざす視線を(下)

2017年7月15日とくぎんトモニプラザでの発言 ●小西昌幸

●2017(平成29)年07月15日(土)18時30分から、徳島市在住有志で構成された市民グループ《文化センターの存続を求める会》主催で《一日も早い「市民のホール」実現に向けて～市民パネルディスカッション》という会があり、話す機会がありました(会場は、徳島市のとくぎんトモニプラザ4階会議室2)。そこでの私の発言を2回に分けて掲載します●誤解されがちですが、ホールというのは建設したら終わりではなく、そこからスタートになるわけです。充実した施設にするためには、企画力などソフト面をどう充実させてゆかということがとても重要だと思います●徳島市の場合、現段階ではまだ建設も始まっていませんから、もっと手前の部分、より良い文化施設をめざす視線というものを提案できたらと考え、発言しました。あくまで粗雑な論考であり、大した内容ではありませんが、何かの参考になれば幸いです。★(上)は前号掲載

■続いてソフト面のことを駆け足で述べたいと思います。
■企画力を持った人材、面白いアイデアを持った人材の配置ということが大切だと思うのですが、たぶん間違いなく徳島市当局は指定管理というかたちで業者さんに任せてしまおうと考えているのではないかと思います。私が最も信頼できると思う企画力を持った公立施設は、徳島市の木工会館です。木工会館の場合は、あくまでも、展示スペースでの企画ですので、今日の議題とは異なるテーマかもしれませんが、木工会館の企画力は素晴らしいと感服しています。徳島市立木工会館のような企画力・発想力・バイタリティを持った施設であってほしいと願います。
■あと二つほどでお話を終えたいと思います。一つは、だいたい文化施設やホールは「文化情報の発信スペース」というような位置づけがなされると思います。その、一番簡単な実践例を述べたいと思います。それは「各地の催しのチラシが、あそこに行けばいつでも入手できるぞ」というような空間をつくることです。参考例としては、文化の森の3階に全国各地の美術館のチラシを置いてあるスペースがあるのですが、それは皆さんご存知でしょうか。たぶん60か所以上あると思いますが、私のような人間はそこにしゃがみ込んでチラシを物色するだけで、幸福な気分になるのです。もう一つは少し中途半端な面はあるのですが、北島町立図書館・創世ホールの1階スペースです。入り口入ってすぐのところ、エントランス・ホールに、ポスターが70枚ぐらい貼れるスペースを設けています。そして図書館入口のところにチラシをたくさん置いています。そういうスペースがあるとよいのではないかと思います。北島町の場合は、県内の文化施設は当然ですが、県外の施設のものも喜んで置くようにしています。例えば高知県立美術館や文学館、丸亀市の猪熊弦一郎現代美術館、兵庫県立美術館、東京駅の美術館・東京ステーションギャラリーなどです。これらの施設には、創世ホールの催しのチラシやポスターも当然置いていただくわけです。催しの広報宣伝や集客は本当に大変です。ですから、苦労している者同士、協力し合い助け合うということがとても大切です。大きな催しを企画しても人を集めるのは並大抵ではありません。普通に通りすがりの人が、ポスターをいつでも眺められて、チラシも見ることができて、必要

なチラシを持ち帰ることができるような空間をぜひ作っていただけないかと思います。でも、これも実は大きな組織は難しい場合があるのです。つまり、何かというと、管財課を通してくださいとか、そういう官僚思考を持った人がいる場合は多分うまくゆきません。ある施設がチラシを置いてほしいと言ってきたのに、冷たい対応をしておいて、そのくせ自分の催しの宣伝チラシを平気で送りつけたりする。近所の学習塾のチラシなどはお断りするべきですが、公立文化施設同士のチラシやポスターの交換はどしどしやるべきである。そのように望みます。

■終わりに、参考になるかどうかわかりませんが北島町で日野皓正(ひの・てるまさ)さんのコンサートを3回やった経験をお話します。日野さんの事務所のマネージャーは、実は、鳴門市大麻町のご出身です。田淵さんとおっしゃって、まだお若い方です。その方のお父さんがある日、創世ホールの事務所に来ました。息子が日野さんのマネージャーをしているということ、半年ほど先の日程を抑えて、その時期に日野さんの西日本ツアーがあり、オフの日があるので、もったいないから小さなホールでよいからやれないかなあ、という打診でした。私は喜んでお受けしますとお話しました。この場合は、貸し館です。お父上との協議では、会場費もちゃんとお支払いしますということでした。たぶん貸し館料は十数万円です。その晩私は、天井を眺めながら考えました。日野さんは普通なら1千人規模の動員力を持つ人なので、もし町が予算を組んで呼ぼうとしたらたぶん5百万円は必要だろう、それが負担なしで実現するわけです。ならば、せめて会場費がかからないようにした方がよいのではないだろうか。こういう場合の方法としては、名義共催のやり方があります。つまり、実際の主催者は会場を借りて催しを実行する人なのですが、施設の名義共催ということで、「共催＝北島町創世ホール」と刷り込んでもらいます。そのことで、会場費は免除します。その代わり、ホールからの負担はなし、チラシやポスターの印刷費や宣伝努力や受付のもぎりや駐車場誘導、出演者送迎、音響照明など一式はすべて主催者が責任を持ってやること、そして収益はすべて持って行ってください、後は事故なく運営し、元通りに返して下さったら結構です、という決まりです。そういうことで一回やり、二年後にもう一度やって常に超満員で、お客さんにも出演者の方々にも主催者スタッフにもとても喜んでいただけました。さすがにこれで終わりだろうと思っていたら、田淵さんのお父上から、「小西さん、この前正月に息子が帰った時にあなたがもう定年退職を迎える、さびしいなあという話をしたら、『お父さん、そういうことなら創世ホールでもう一度やろう』と言いましてね、いっちょどうですか、三回目やりませんか」、というお話をいただいたわけです。それで三回目が実現しました。そんなことがありました。町の予算書は北島町立図書館にありますから、ぜひ見ていただきたいのですが、その三回とも町は一切出演料などのお金を使わずに、日野皓正さんのコンサートをやっております。鳴門の田淵さんや日野さんに私は足を向けて眠れない、とても大きな恩義があるというわけでございます。

■以上、とりとめの話になったかと存じますが、とりあえず私のお話を終わらせていただきます。この後パネリストとして意見などを述べさせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。(文責＝小西昌幸)

創世ホールの自主事業と歳月の重みについて ●小西昌幸

■今年(2017年)10月27日(金)に開催する北島トラディショナル・ナイトは第21回目です。当催しは1997年秋スタートなので、満20周年となります。今回のご出演は、古楽界の至宝デュオというべき、平井満美子さんと佐野健二ご夫妻です(「英国・ケルトの愛らしい旋律～歌とリュートによるルネサンスから現代のブリテン諸島の歌曲の数々」、19時開演)。お二人には、過去に2度「北島クラシカル・エレガンス」で創世ホールにご登場いただいています(1996年2月24日「古きよきイギリスの愛の歌」、2001年2月18日「古きよき愛の歌を集めて～フランス、イタリア、イギリスをめぐる旅」)。今年のトラディショナル・ナイトは古楽方面から格調高くケルト音楽の奥深さを探求します。演奏会は、音響反射板をセツトし生音(なまおと)で行なう予定です。ご期待下さい。諸般の事情でチラシ完成は9月中旬になる見込みです。馬力をかけて宣伝展開しますので、どうかご支援ください。
■山田太一さん(2015年2月8日「こんな家族を書きました～『早春スケッチブック』がめざしたもの」で創世ホール講演)が脳出血で今年初めに倒れ、今ご療養中である旨の報道がありました。7月1日に早稲田大学演劇博物館で「テレビの見る夢一大テレビ博覧会」「山田太一展」を見て来たばかりでしたので驚きました。山田太一展会場では、入ってすぐのところ「早春スケッチブック」の映像を流していました。当館の方向は間違っていないと思いました。山田太一さんは創世ホール講演の際は80歳で、今83歳です。そして山田さんの翌年ご登場いただいた地引雄一さん(「東京ロッカーズからプロジェクトFUKUSHIMA!へ」は現在脳腫瘍の治療中です。また、過去に2回登場いただいた池田憲章さん(2007年2月25日「故郷は地球～脚本家・佐々木守がめざしたもの」、2011年2月27日「脚本家・金城哲夫～特撮とドラマを初めて融合させた人」で講演)は昨年脳梗塞で倒れ、リハビリ中です。8月26、27日の「日本SF大会」には車椅子で出演されたということでした。そして「文化ジャーナル」登場回数が一番多い漫画家の長谷邦夫先生も、今は療養生活に入っておられます。
■最近しみじみ思うことは、演奏会にせよ、講演会にせよ、自主事業の催しもまた一期一会なのではないか、今実現できる幸福をその会場で心から味わい尽くすべきであろうということです。
■数年後に振り返ったとき、あのと講義ができたのは本当に幸福な出来事だったのだ、その数年後では決して実現できなかったのだという類の出来事がどんどん増えているような気がします。うまく言い表せませんが、やはり歳月の重みのようなものを感じます。
■当館ゆかりの講師先生や、出演者の方でご闘病中のすべての方々のご快復をお祈りしたいと思います。私は、素晴らしい講師先生の催しに関与できたこと、それらの方々を送迎し、一緒に食事し、打ち合わせし、催しを実現できたことを誇りに思います。
■これからの催しとしては、12月16日に遠藤ミチロウさん、来年1月に映画「湾生回家(わんせいいかい)」上映会を予定しています。そして2月初めの創世ホール講演会は、現在講師先生に依頼状をお送りし、交渉しているところです。決まり次第、お知らせいたします。
■実は今日、池田憲章氏からたまたま昼休みに電話があり、色々話しました。少し舌がもつれ気味ですが、内容はいつもと全く変わりません。私が最近のドラマネタとして、BS放送で毎朝勝新太郎主演の「座頭市」シリーズ(テレビドラマ版)をやっているのずっと録画してチェックしていると、とにかくめつぼう面白く、新藤兼人さんが脚本を書いていた、続編(正確には「新・座頭市」)では石原裕次郎がまるでプログレのようなしっかりしたロック音楽の伴奏で主題歌(「不思議な夢」)を歌っていたりして凄いいねー、とか勝新自身の監督作品はあれは前衛作品ですね、などと水を向けると、池田氏の口からは(受話器からは)よどみなく森一生や岸田森や「警視K」や「燃えつきた地図」などの固有名詞が機関銃のように連射されるのでした。幸福でした。(2017年9月2日脱稿)